蘇陽町の文化財

第二集(石造物関係)

蘇陽町教育委員会
蘇陽町文化財保護委員会

正　誤　表

下記のような誤りがありますので、訂正の上ご使用下さい。

番号	頁	行目	誤	正
64	19	下14	庚申講	奉修康申
70	21	下14	又その他より	又その地より
84	25	上 2	山部家	山辺家
126	35	上 6	其	基
128	35	下 8	老松大木あったが	老松の大木があったが
145	42	上 7 上14	地　像	地　蔵
177	50	上15	おもしもさ	おもしろさ
203	58	下13	されていたもを	されていたものを
248	75	上12	山部家	山辺家
281	97	下 3	40年頃	28年頃
284	99	下 3	称しシテ	称シテ
285	〃	下 8	—	下に蘇を挿入
291	104	上 3	集数地	集散地
〃	〃	上17	卒業一同	卒業生一同
306	116	上 6	戸田真一郎	戸田真四郎
312	120	上 6	相違いで	相違で
319	124	下17	甲長崎	上長崎
335の2	132	下 3	後藤　亘	後藤恒二

蘇陽町の文化財

第二集(石造物関係)

蘇陽町教育委員会
蘇陽町文化財保護委員会

題字　文化財保護委員

佐藤幸孝

序

本町におきまして、本年、文化財第二集を刊行することが出来ました。第一集では、本町文化財について総花的に代表的なものを紹介しましたが、第二集では、本町内の石造文化財を主として調査して参りました。石造物には、色々な種目がありますが、どれを見ても、一つ一つが、私達の祖先が残された遺産であります。本町は、素晴しいこの自然環境に恵まれ、古い時代から、私達の祖先が、この地域を開き、長い歴史と特色ある文化を守り努力の積み重ねによって、今日の繁栄を築きあげてこられたことを忘れてはならないと思います。一つの地蔵さんも、無意味に建てられたものではなく、素朴な村人の願がこめられ守り続けられ、永い歳月の風雪に耐え乍ら、物云わずとも、私達の生活を眺めてきていることでしょう。中には苔むした姿のまゝや、道路工事等で移転されたり、又心なき人に盗まれて、石室のみ淋しく建っていたりしているものもあります。

今日の日本は、平和を愛し、文化を尊ぶ、民主国家として、発展してきています。私達の祖先が残してくれた、これ等の遺産とも云うべき、文化財は、私達が守り、後世に残し継承してゆく、責務があると思います。又今のうちに記録にとどめ末永く保存しようと云うことで、第二集の発行のはこびとなりました。

この編さんにあたって、殊に、文化財保護委員の方々の苦心と御労苦に対し、深甚なる敬意を表し感謝申し上げます。

又町民各位の御参考になれば幸甚であります。

昭和六十一年三月

蘇陽町教育長　小崎愼夫

はしがき

私達の祖先が残した貴重な文化財は、蘇陽町の歴史の一つであります。これらの文化財を長く大切に保存し後世に残し伝え行くのも町民としての務めであると思います。一昨年、文化財の第一集を発行しましたが、本年度、第二集として石造物関係を調査してきました。過日、町内の現地調査を行いましたが、新しく発見されたものが沢山ありました。

何分にも広域な本町のことで、まだ未発見、未調査のものが数多くあると思います。

又誤記等もあろうかと思いますが御許し戴きたいと思います。写真はできるだけ多く出したいと考えていましたが、紙面の都合で割愛しました。なお調査不充分な所がありますが今後調査したいと思っていますので、お気付きの点や、洩れた点等に、つきましたは、御教示下さるようお願いします。

引き続き第三集の計画でありますが、文化財等について、御存知の事など、お気付のことがありましたら御指導願います。

最后に本調査に当たり御教示御協力戴きました諸先輩の方々に厚く御礼申し上げます。本紙が各界の御参考になれば幸甚であります。

追伸　この第二集に、現在では、文化財とまでは云われない、明治以後の記念碑等も調査にあわせて調べました。

今年は明治百十九年目になりますが、石造物も、百年以上経過しますと、碑文等が判らなくなりますので、後日の参考までと思い、併せて登載いたしました。

昭和六十一年三月

蘇陽町文化財保護委員
片倉　義美
大内田忠秋
長谷野官蔵
後藤　松寿
佐藤　幸孝

目次

序
はしがき
第1編　建造物……1
一、宝塔……1
二、宝篋印塔……5
三、供養塔……8
四、灯籠……14
五、板碑……19
1、庚申信仰碑……19
2、猿田彦大神……26
第2編　石佛……34
一、石佛……34
1、石室……34
2、石仏……48
二、六地蔵……69

文中□は、判読が出来ないもの

第3編　墓碑……72
第4編　石塔……82
第5編　道標……85
第6編　石橋……88
第7編　記念碑等……90
一、人物……90
二、史蹟……96
三、忠魂碑等……99
四、学校……103
五、道路……113
六、水道……124
七、土地改良……132
八、その他の記念碑……135
第8編　その他（自然石等）……139
参考及引用文献……143
蘇陽町全図及位置図……144
年代表……176

第1編　建造物

石造文化財の種類について

石造文化財と、一口にいっても、色々な種類があり、単に、石の佛だけでなく、石の塔や、灯籠、板碑、鳥居、石橋、記念碑、墓碑、手洗石等、種類、構造、形状や、作製の目的など、多種多様である。

今回は、それ等、石造物のうち、各家庭の日用品であったものや、又個人専用のもの、個人の墓石（一部本町の歴史に関係あるものは入れてある）など、又神社、仏閣に、直接関係あるもの等は、今後の調査の時に掲げることにしたので除き、編纂の都合で、目次のとおりに区分して編纂した。

一、宝　塔

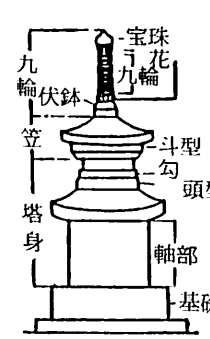
もともと、塔というものは、古代のインドで、亡くなった人の遺骨を葬った半球形の墳丘（ふんきゅう）をスッーパというが、このスッーパは、漢字で、卒塔婆（そとうば）と書き、これを略して、塔婆、または塔というようになったという。このインドの塔が中国で発達して我が国には飛鳥（あすか）時代に伝えられ、奈良時代以降になると、これ等の石造の塔は盛んに造立され、以後全国に普及したといわれる。

又、仏教説話によって、塔内に釈迦・多宝の二如来を安置するのが本来の形である。

一重のものを宝塔、二重式のものを、多宝塔と呼ぶ。

本町高畑の年称神社のものは、大宝塔と云える。

宝塔



多宝塔

一　所在地　大字高畑

年称神社境内に大宝塔がある（第一集参照）

基礎石積で巾四・二二、高一・三米、塔長三・五米で、大乗妙典と四面に大字あり、弘化三年（一八四六）の建立である。

宝塔の経文

経　云

能於此塔一香一花礼拝供養八十億刧生死重罪一時消滅

伏　願

今上皇帝宝祚萬々歳大簀君代武運長久天下太平国家安全風爾順時五穀能登一切厚生皆帰正法郷党同行四来緇素見聞毀譽生々世々六親眷属及無依無怙法界之萬霊同生極楽成等正覺

維時　弘化三（一八四六）丙午年夏吉辰

宝塔の継目の処に「維時弘化三（一八四六）丙午年夏吉辰、石工、坂梨、栄七、藤吉、光太」と刻まれている。

（通　訳）

此の塔に一香一花を能くし、礼拝供養すれば、八十億劫生死重罪、一時に消滅す。

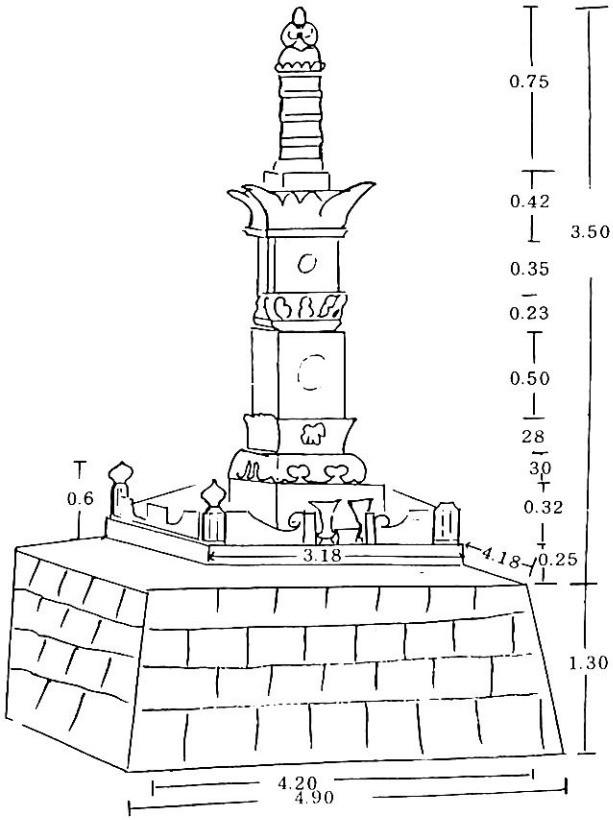
伏して願わくば

今上皇帝宝祚萬々歳、大樹（将軍家のこと）代々、武運長久、天下太平、国家安全、風雨時に順い、五穀能く登り、一切群、生皆、正法に帰し、郷党の同行、四来の緇素（僧俗）、見聞毀誉、生々世々、六親眷属、無依無怙に及び法界の万霊、同じく、極楽に生じ等正覚を成さんことを。

維時　弘化三（一八四六）丙午年夏吉辰

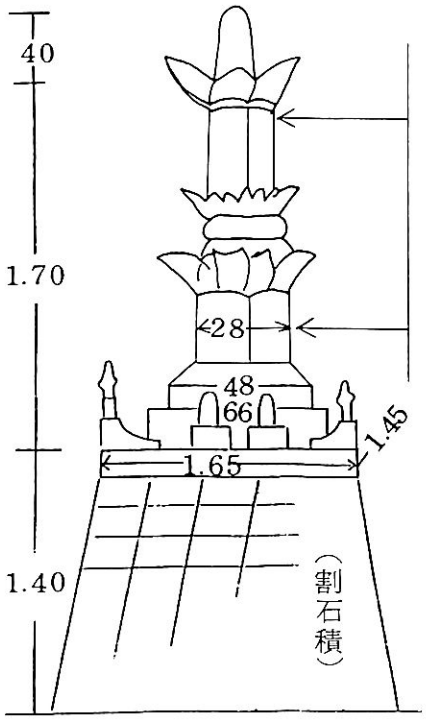
当時、弘法大師の信仰が厚く、四国八十八ヶ所の拝所として建立されたとされている。

塔正面上部に（ウン）の梵字・中央部正面（ウン）・左面（クラーク）・右面（アク）・後面（キリーク）の梵字がある。



二　所在地　大字塩出迫（下塩出）

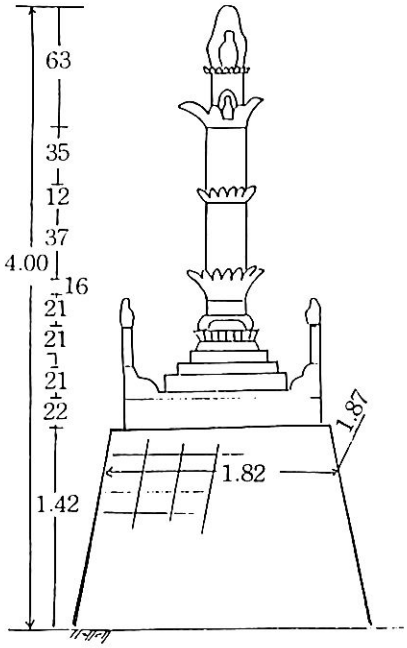
下塩出部落観音堂前に、三・五米の、宝塔が、明治三十八年十月に、建立されている。これは、下塩出、吉田正明氏が、明治三十七、八年戦役記念の為に、建立されたもので、宝塔の碑文は、次のようにある。



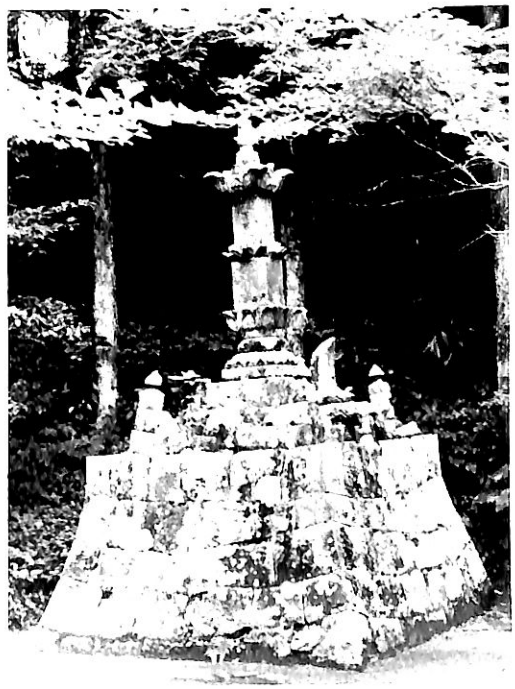
天下恭平 五穀豊登	陸海軍人 武運長久	天皇陛下 聖躬萬才	皇威宣揚 敵国降伏
浄財施主 塩出信徒中 十方有志之士	明治三十七、八年 戦役記念ノ為 此塔ヲ建立ス 明治三十八年十月吉日　発願主 天台宗 吉田正明	大乗妙典普門品塔	明治三十七、八年 戦役際 軍資金 全員献納候段寄持候事 熊本県知事正四位勲二等 江木千之
（南）	（西）	（北）	（東）

三　所在地　大字伊勢（旅草）

旅草観音堂前に、高四米の宝塔が、明治三十七年九月に建立されてある。これは、明治三十七、八年戦役中に、戦勝祈願の為に建立されたものと思われる。願主は、吉田正明と記されてある。同じ型のものが、下塩出にも建てゝあるが、ここの宝塔には、四面の周囲に、諸仏四体が置かれてあり、宝塔の碑文には次のようにある。



出征軍人 身体健康	台石に 上益城郡御嶽村 彫作人　石工 山下政太郎
皇軍全勝 敵国降伏	
天皇陛下 聖寿無窮	浄財施主 旅草信人中 十方有志の士
大乗 一宇一石塔 妙典	惟時明治三十七年九月 爲征露記念読誦普門品 千二百巻移転再建　塔 願主吉田正明



四　所在地　大字滝上（竿渡）

吉田家墓地横に宝塔の頭部の一部と思われるものあり（長〇・四六、巾〇・一五米）詳しきことは不明である。

五　所在地　大字塩原（黒原）

国道二六五号線（通称黒原一本松）より右に入り（町道黒原線）約三〇〇米の分岐より左に約二〇〇米の右杉山の頂に、宝塔の一部と思われる、塔身（〇・五四、下部〇・一五、頭部巾〇・〇七米）の上部が建っている。

地形は、円墳形にて盛り上げられてあり、詳しきことは不明である。

六　所在地　大字柏（元柏）

有働研さん宅横の墓地の中に相当の年月を経たる無縫塔（卵塔）が建立されてあり、土台及中間部は崩れている。

柱は、八角型で、現存の高さ一・一八米、頭部（高〇・四三、巾〇・三五米）下部に宝篋印塔の頭部等が積まれてある。由緒ある宝塔と思われるが古老に聞くも詳しきこと不明である。

七　所在地　大字旅草

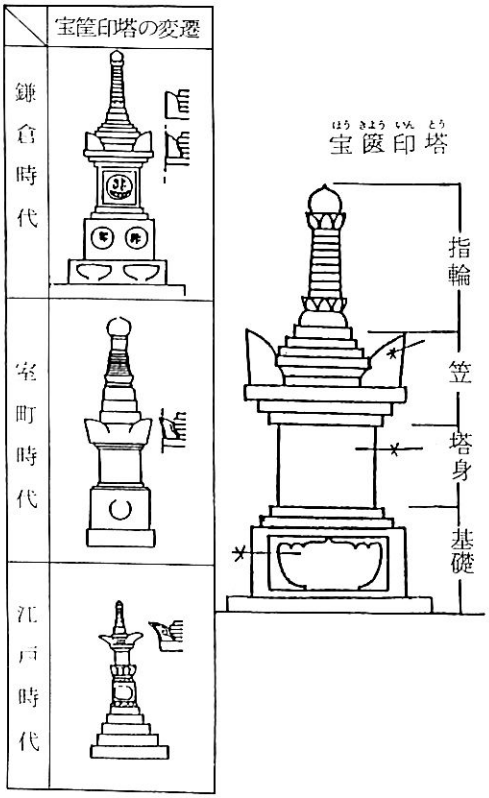
観音堂の右側に宝塔が一基建立されてある。（下巾〇・五八、全長一・一八米）塔身に天皇陛下、大乗好典とあり建立年月等不明である。その根元に梵字がある。宝塔の一部があるが詳しきこと不明。

二、宝篋印塔

図のように四角の四面をもった一重の塔で、この塔を建てる目的は、願主が現世の利益をうけるための祈願や、また故人の追善供養のためのものなどであったが墓石代りにまで使われるようになった。

宝篋印陀羅尼経を納めて供養する塔で、インドに始まったもので、日本へは平安中期に渡来するが、石造物として普及するのは鎌倉後期からで、室町時代に盛行した。

この塔の造立の年代は図に示した隅飾突起が、鎌倉期は垂直に近く立っているが、室町期には、やゝ外側にはり出し、江戸期になると極端に四方にはり出してくることによって見分けられる。



八　所在地　大字米迫（米山）

今村山城守の廟の正面祠に、宝篋印塔が、祭祀されてある。この地は、永録、天正の頃今村山城守源親貞の居城跡にて、昭和三十年四月、今村家三百八十年祭を記念して建立されたものである。（全長約一・三〇米）

九　所在地　大字　今

部落観音堂前に、宝篋印塔の頭部及その一部と思われるもの数基が、合祀されてあるが、詳しきことは不明である。

お堂は、元治元年（一八六四）の建立であり、部落の人は、通称、観音さんと呼んでいる。

一〇　所在地　大字馬見原（岩尾野）

古川俊次氏宅庭先に建立されてある嘉永七年（一八五四）十月吉日世話人と銘がある。

基礎（巾〇・五、厚〇・二二米）塔身（巾〇・三二、高〇・五五米）

笠（下巾〇・五五、上巾〇・二一、高〇・三〇米）上塔（巾〇・一三、高〇・五〇米）三面に梵字の刻みがある。

横に石堂がある（巾〇・四七、高〇・五、内巾〇・三一米、笠下巾〇・六八、上巾〇・一八、高〇・三米）中に宝篋印塔の一部（長〇・二、巾〇・一三米）が祀れてある。

詳しきこと不明である。

一一　所在地　大字長崎（上長崎）

公民館の左側に、二基が建立されてある。

下部は崩壊しているが、鎌倉時代建立のものと思われる。

詳しいことは不明である。

一二　所在地　大字馬見原（岩尾野）

国道二六五号線沿い、古川繁氏宅前に一基あり、土台は崩壊しているが、現在高さ〇・九五米にて鎌倉時代建立のものと思

われる。

詳しきことは不明である。その横に、墓石が三基列んでいるが一つは、延暦二（七八三）一基（一二〇三年前となる）と、外二つは、享保七（一七二二）と天保七（一八三六）の建立である。

一三　所在地　大字滝上（土戸）

町道（公民館より約百米菅尾寄り）左側上部杉山に、塔三基がある。（古陳進氏所有山林地）通称山状塚と呼ばれているが詳しきこと不明なり、昔桧の大木があったと云う。

㋐キリーク（阿弥陀如来）の印あり

㋑タラーク（虚空蔵菩薩）右二種の梵字が刻まれてある。

一四　所在地　大字滝上（土戸）

町和義氏宅裏山にあり相当古く宝篋印塔の一部があり菊池政高公の墓地と云われているが詳でない台石、（巾〇・三一、高〇・二米）の上に巾〇・一三、長〇・三七米の頭部が祀ってある。外から見ると円墳形状にて、表の道路側には、古い石垣が積まれてあり昔は大きい墓地であったと思われる所である。

一五　所在地　大字花上（花寺）

冨永政雄氏宅裏竹山に印塔の頭部のみがある。台地型のところで、昔、供養塔として建立されたものと思われるが詳しきこと不明である。

一六　所在地　大字八木（八矢）

天満宮、前方（竹山）に印塔が一基ある。ここを部落の人はかいさん森と、昔から呼んでいるが相当古く、壊れかゝっている（高一・〇米

余、巾〇・三六米）鎌倉時代のものと思われるが、詳しきことは不明。

一七　所在地　大字二瀬本（丸小野）

お大師堂の中央盛高地に、宝篋印塔の上部のものと思われる長〇・四六、巾〇・一五米の塔が建っている。昔この地は、由緒ある地と思われるが詳しきことは不明である。

一八　所在地　大字柏（溜渕）

県道河内、矢部線、山下享氏人口、三叉路に、宝篋印塔の一部がある。相当古いものと思われるが年号、由緒等、不明である。

一九　所在地　大字下山（前畑）

村中道路左上の杉竹山の六地蔵の前方に宝篋印塔の頭部及宝塔の頭部（長〇・四、経〇・一五、頭部巾〇・一八米）のみがある。由緒ある地と思われるが詳しきことは不明である。

二〇　所在地　大字長谷（倉木山）

部落人口左上に円墳型の山がある。頂上まで約十五米程でこの頂点に鎌倉時代のものと思われる宝篋印塔、一基が建立されてある、全高一・五七、塔身巾〇・三三、笠巾〇・五八米で塔身に月輪が刻まれてある。此の周辺に、五個程の印塔の一部が合祀されてあるが詳しきことは不明である。

三、供養塔

供養という言葉は、飲食物や香華（こうげ）などを三宝（佛宝・法宝・僧宝を仏教における三種の宝という）を、父母、師長（先生や目上の人）および亡くなった人に捧げることをいうのであるが、この供養をした功徳（くどく）というものは、供養を受ける者よりも、むしろ供養をする人の方に返ってくるといわれている。

この供養のためには仏事とか法事を行うが、この供養塔も同じく、その気持をもって、供養の記念として建てるものである。また畜獣を多く殺したためとか、亡くなった牛馬の霊を慰めるための供養塔もある。この供養塔には一定の決まった形式はな

く、一般には墓石のような形のものが多いが、その造立のときは経文を納めたり、経文を一石に一字ずつ書いて埋められたりすることが多いと云われている。

二二　所在地　大字馬見原

火伏地蔵堂境内の右側に切石の塔数基が合祀されてあるが、延文六年（一三六一）（六二五年前）に、馬見原町と町名が刻まれてあり、馬見原は、その当時より町を形成し、繁栄していたことを物語る物件の一つである。

一、石塔　台石（巾〇・三八、高〇・三五米、塔身高〇・四、巾〇・二四米）

元文六辛酉年（一七四一）三月吉日　田中弥治右門

中央に　三界万霊　と刻みあり

一、石塔　台石なし（高〇・三四、巾〇・三二米）

延文六年（一三六一）末　正月十七日

中央に　奉供養

右面に　馬見原甲中　世話人治助

左面に　俗名　武兵□・勘次・亦年・弥吉　と銘あり

他に、地蔵尊外二基あるが無名にて、詳しきことは不明である。

二三　所在地　大字馬見原　（古町）

国道二六五号線沿、右側（原商店横）に、自然石の碑が建立されてある。

碑（高一・三、巾〇・六六、厚〇・三五米）台石（上段巾〇・九、厚〇・一、下段巾一・一〇、厚〇・二五米）

碑石に、世祖方　八田九工門・小堀尉左右工門

干時　天保五甲午（一八三四）爲先祖追孝

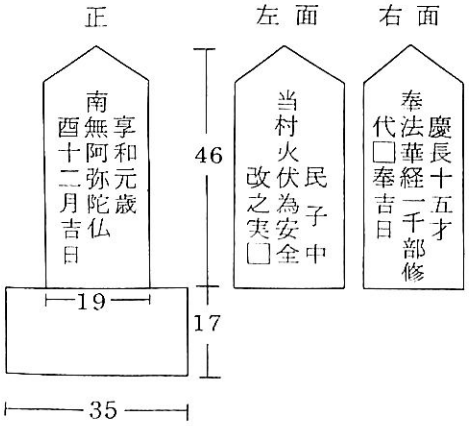
浄土三部妙典塔

書写一字一石　願主、曽我忠兵衛祐之と銘あり

二四　所在地　大字塩

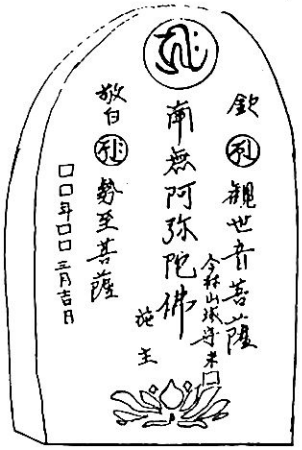
出迫（下塩出）

観音堂横に切石の碑が建立しあり、台石の周囲に、供養石と思われる川小石多数あり、詳しきことは不明である。



二五　所在地　大字　今

通称、山城さんと呼ばれている（今村親雄氏宅上山）ところに、タブの古木の根元に、自然石の供養塔が建立されてある。中央上部に、（キリーク）の梵字ありて、南無阿弥陀佛、脇侍として右に観世音菩薩、左に、勢至菩薩、下部に、今村山城守、施主と銘あり、建立年月は、読みとれず。



此の地は、別名「西の城」といい、役場上の地を、「東の城」と呼ばれ、今村山城守の出城の跡と云われている。

碑（下巾〇・三八、上巾〇・三二、厚〇・一五、長〇・九五米）

二六　所在地　大字今（高見）

農協本所入口付近より旧道を左に入り登り上ったところ。

標高六一五米の測点があり、通稱「高佛」と呼ばれている。

ここに（今部落山野の墓）と記された、碑が建っている。

以前は、今部落の中に、あったものを、昭和の初めに移転されたものと云われ、肥後藩時代、原野の利用を、各地区に区割する際に、代表者が出夫し、標示していたと云う。

此の代表者の、労苦を、労い祀ったものと伝えられている。

別名「野分の墓」とも云われている。碑名、台石二段（下巾〇・三五、中巾〇・六二、厚〇・二、高一・三米）

二七　所在地　大字米迫（米山）

今村山城守城跡に、山城守の廟があり、その前に切石の碑が建っている。

奉寄進、文化十一年（一八一四）十二月、米山村、今村中、と銘あり。

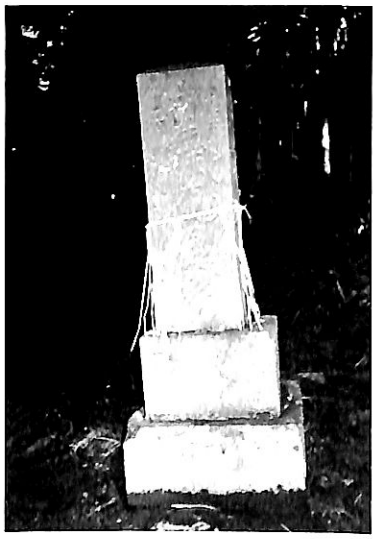
今村山城守一族の供養塔として、米山、今村、の人々が、当時、建てられたものと思われる。

基礎（巾〇・三五、厚〇・二）塔身（高〇・五六、巾〇・一九米）笠（巾〇・三、高〇・三六米）

二八　所在地　大字二瀬本（丸小野）

夜渡神楽で有名になった、火伏地蔵、秋葉神社の境内の左側に、高さ一・五五（台石〇・六）米の切石の碑が建立されてある。

碑には、正面に二聖、二天、南無妙法蓮華経、左面に、奉浄池殿清正大神儀、右面に、丸小野、仁瀬本、大ノ原、産子中、後面に、嘉永二年（一八四九）酉七月立之、と銘記あり。詳しきことは不明である。



二九　所在地　大字二瀬本（丸小野）

秋葉神社境内に、台石、塔石共に自然石で、高さ〇・八、巾〇・四米の供養塔が建立されてある。碑に、天ノ川水神とあり、右に、天保十二年（一八四一）仁世本住人、山口伯寿左に辛丑閏正月吉日、田上隆太、と銘あり。詳しきことは不明である。

三〇　所在地　大字二瀬本（丸小野）

丸小野、熊野神社（通称丸小野権現さん）の境内地の下段に、五基の石塔（碑）が建立されてあり、相当格式あるもの一基あるも無名のため不詳なり、同地の古老に聞けば「矢野宗左衛門」と云う人の石碑で現在の権現社の御神体が昔、川流れして、日向国、丸小野の地に流れていたのを、此の地の丸小野に持参し祀ったのが現在の熊野神社で、当時丸小野は、十三戸あって、その「矢野」なる人を当番順に定めて養っていたと云う。矢野なる人が病気となり死亡したため、其の遺骸を葬り祀ったのが、五基の中、左から二番目の石碑だと云われている。宮崎県に今も、丸小野という地名ありて、権現神社を建立し、当神社の祭典日（旧十月十日）には宮崎県でも、祭典を行っているという。

五基の内右側の一基は、無縫塔で無名にして、高さ一・五五、塔身〇・七、台石巾〇・九米の立派なものである。次の一基も無名の、石塔が建っている。

中央のものは、台石巾〇・六、厚〇・二米の上に、自然石で、高さ一・二三米あり、正面に、丸賢菩薩御霊と銘がある。四番目（左よ

り二番目）は、台石、巾〇・九米の上に、高さ一・一米の板碑があり前述の、矢野宗左衛門の墓石で、中央上部に㊫の印があり、丸小野村中、嘉永元年（一八四八）十二月三日と銘がある。左側の一基は高さ〇・九台石巾〇・四五、塔身高〇・四巾〇・二五米の無縫塔の形をしているが、無名のものである。以上の五基が横一列に建立されてある。

三一　所在地　大字二瀬本（宮の下）

町道下山線入口左側道上に、碑が建立されてある。基礎（高一・一五、巾一・六米）台石二段（高〇・五七、下巾〇・七七、上巾〇・四八米）碑石（高一・六〇、巾〇・三米の四角柱）

碑の正面に、阿蘇谷得坊山重丸、法主、今山寺香春とあり、横面に（バーンク）大日如来の梵字があり、大乗妙典塔一字一石とあり、明治三十四年四月十三日、裏面に、有縁無縁供養建主、小屋迫彦三郎、と銘がある。

三二　所在地　大字伊勢（梶原）

佐藤高雄氏宅入口より右に小道を、約二〇〇米程行った所の、椿の大木の根に、自然石の碑（高〇・九五、巾〇・四五、厚約〇・三米）が建立されてある中央上部に（キリーク）の梵字があり、七所霊神、大乗法口七部、文政十一戊子（一八二八）三月日、三次、福次、貞十、立之と銘がある。

村の人は、ここを「七チヤゴさん」と呼んでいる。古老の話では、昔、七人の落武者ありて、その霊を葬ってあると云う。

三三　所在地　大字柳（猿丸）

部落公民館より約二〇〇米位い、坂を上った地点に、現在くぬぎが植栽されてあるが、調度円墳形の台地を約三〇米程上った頂上に基礎石積（高一・三、下巾二・二、上巾一・五三米）の上に台石（高〇・二五、巾〇・七九米）ありて、その上に、碑（高〇・九八、巾〇・二三米）が建っている。碑には、梵字らしきものが数個見られるが、はっきりしない。台石には、奉大正十年三月吉日井芹彦四郎、世話人、佐藤昌作、天草郡姫戸町、木下戸三郎と銘がある。その横に小さい仏像が両側に一体づつあり左側は（台石巾〇・二一、厚〇・一三米、仏像高〇・三二米）地蔵さんのようで台石に、大正十年八月六日、二子石ハツ子、と刻あり、右側も、同じ大きさで、千手観音像と思わ